

装いの民俗

今回のかやぶんかわら版では、前号に引き続き、明野歴史民俗資料館第15回企画展「装いの民俗」についてお伝えします。今号では、衣生活周辺の民俗や、モノの発展についてご説明します。(内海)

かつて、衣服はどのようなで作られたのでしょうか？

素材

江戸時代中期頃から、仕事着に木綿が使われるようになりました。峡北地方でも明治時代頃までは綿の栽培が行われていましたが、次第に減少し、綿糸は購入することが多かったようです。養蚕ようさんをしている家では、出荷できなかつたタママユたままゆ(蚕ひきが二疋入った大きな繭まゆ)やビショマユくずまゆ(屑繭)を使って絹織物を作り、余所行きや普段着としていました。



織り

購入した綿糸わたいとを使って機織はたおりをしました。自宅で行う機織りを「ウチオリ」といいます。昭和に入り、機織機がある家が少なくなると、機織りが得意な家に頼んだり、綿布わたぬいをミセみやうしやうや行商から購入しました。

染め

綿もしくは絹の糸や布こゝろやは、紺屋くろや(染物屋)で染めてもらいました(自宅で染め粉あいでを使って染めることもありましたが)。木綿は藍染あいにぞめにすることが多く、紺屋には、縞模様だけでも数百種類のパターンがあったといい、花柄のように見える大正緋たいしやうがすりなども登場し、染色は次第に装飾的になっていきました。紺屋は、昭和30~40年代頃まであったといい、その後は、市販の仕事着を購入するようになりました。

～裁縫～



糸・針・ヘライタゆびぬき・指貫ゆびぬきなどが入った「針箱」は、他の裁縫道具とともに嫁入り道具として持参しました。裁縫のうかんきは農閑期の仕事でしたが、カルサンなどの簡単なものは農閑期以外でも縫ったといいます。大正時代にはミシンが普及しますが、初期のものはほとんどが輸入品でした。国産のミシンが多く作られるようになるのは昭和初頭で、手回し式、足踏み式と発展していき、峡北地方でも、昭和10年代には足踏みミシンが普及しました。

装いにまつわる道具の変遷



～洗濯～



かつては、たらいと洗濯板を使って洗濯をしました。たらいは、嫁入り道具のひとつでした。昭和5年に、洗濯機が初めて国内生産されました。昭和30年代には洗濯機能のみいっそうしきの一槽式の洗濯機が普及し、昭和40年代には脱水機能がついた二槽式の洗濯機が登場しました。

炭アイロン



～アイロン～

アイロンの一番古い形は火熨斗ひのしです。真鍮製しんちゆうせいで、鍋のような形状をし、底が平らで柄がついています。中に炭火を入れて熱し、平らな底を押し当てて布しほの皺を伸ばしました。明治時代には、炭アイロンがヨーロッパより伝わり普及しました。日本では囲炉裏いろりや火鉢から容易に炭を入れることができたため、火熨斗も炭アイロンも広く普及しました。昭和30年代には電気アイロンが普及し、火熨斗も炭アイロンも衰退しました。



手前から時計回りに、火熨斗・電気アイロン・炭アイロン・焼きゴテ